

東京湾のミヤコドリ・5 東京湾奥部全体での状況

田久保晴孝・川内 博

はじめに

ミヤコドリ(チドリ目ミヤコドリ科ミヤコドリ属・都鳥・Eurasian Oystercatcher)のわが国最大の越冬地は東京湾奥部で、昨年冬には400羽以上が飛来し、越冬しました(二番目は伊勢湾西岸の三重県側海岸で約100羽)。これまでのようすは、本誌の研究部レポートに4回報告しています(No.737・743・744・747)。今回はそのまとめを兼ねて、行動・食性・飛来数の推移についても報告します。

1.ミヤコドリの東京湾奥部での行動・移動状況 [地図参照]

生息の中心は千葉県船橋市の三番瀬(ふなばし海浜公園沖)で、その個体数は東京湾全体と一致します。通常、三番瀬の東側防泥堤(柵)をめぐら・休息に使っていて、ここから採食場所へ移動します。

(1)秋～冬～早春(3月まで)のようす [⇔:行き来、→:矢印方向へ移動]

①三番瀬の防泥堤(柵) [休息・ねぐら場所] ⇔ 三番瀬干潟・カキ礁 [採食場]

②三番瀬 → 塩浜(市川市)や江戸川放水路(主に河口の干潟:市川市)→三番瀬

③三番瀬 ⇔ 幕張(突堤:休息・茜浜 一部採食;千葉市・習志野市)

ア)三番瀬の防泥堤(柵)に釣り人が入っている イ)三番瀬の防泥堤(柵)などにハヤブサが休息・居座っている ウ)大潮の満潮時で風が強い堤(柵)が波にかぶる

以上の場合、幕張でねぐら・休息しています。

☆ミヤコドリは干潮時、夜間も採餌しています(特に冬は夜間に干潟が大きく干出する)

(2)春(4月～5月上旬)のようす

① 三番瀬 ⇔ 葛西海浜公園(東京都江戸川区):陸地を越さずに海上を飛んでいく

② 幕張 → 三番瀬 → 葛西海浜公園 / 幕張 → 葛西海浜公園

ア)三番瀬で潮干狩りなどの人の圧力が大きい(5月連休の休日は1日1万人)

イ)葛西でのノスリ・チュウヒ・ハヤブサ・オオタカなどの猛禽の圧力が小さくなる

ウ)人がいないと岸近くまで来る

エ)満潮時の3時間後から採食のため堤から飛び出し干潟に降りる(AP100cmくらい)

オ)干潮時の3時間前、休息のため干潟から堤へ移動(AP100cmくらい)

※APとは:荒川工事基準面(Arakawa Peil)の略で、荒川の最低水位の高さで、これを基準にして潮位などの高さを表します。

☆夏場も、若鳥たちがおもに葛西臨海公園・東渚を中心に50羽程度(今夏は〇〇羽)が越冬しました。



2. ミヤコドリの採食行動

- ①群れて行動します。
- ②食べ物は、シオフキ > アサリ > マテガイ、カキ(葛西海浜公園では主)などの二枚貝が主で、嘴で貝を開き、中身を取り出して食べます。
- ③採食行動は、海水に脚をつかりながら、汀線よりやや深いところを歩き、嘴で貝を捜します→貝を開ける(主に水の中)→貝をくわえて移動。この時ピピピと大きな声を出します。
- ④カキ礁のカキもこじ開けて食べます(水面および水面下)。干出した干潟にあるカキを、嘴を横にして採食します。

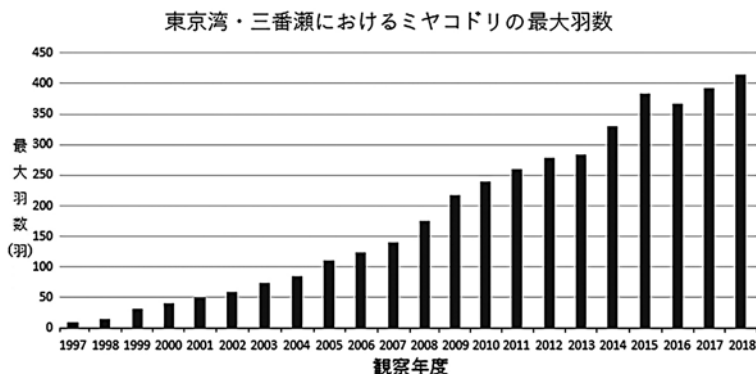
3. 他の鳥との関係

- ①カモメたちがミヤコドリの採った貝を横取り→ミヤコドリは飛んで逃げます。
- ②ハヤブサが出ると集団で沖に逃げ、他のシギなどと一緒には行動しません。

4. 人との距離

- ①ハマシギなど他のシギ・チドリなどより警戒心が強いようです。
- ③汀線に人がいると干潟に降りないで、直接防泥堤(柵)へ移動します。
- ④カメラマン、貝堀人、散歩人、パラグライダーなどが近づくと飛んで移動します。

5. 越冬個体数・越冬個体数の推移グラフ(その年の最大羽数)



終わりに

ミヤコドリ (*Haematopus ostralegus*) は、ユーラシア大陸に生息し、アフリカ大陸からインドや東南アジアにかけて越冬します。

3亜種が知られていて、日本にくるのはその中の *H.o.osculans* という亜種で、カムチャツカ半島あたりで繁殖し、越冬のために飛来していると考えられています。

グラフのように、東京湾では年々越冬渡来数が増加していますが、その生息数は、日本全体では1,000羽以下と考えられています。世界的にも生息数は10,000羽程だといわれ、その保護研究が急がれています。

[東京都のレッドリスト:区部EN、環境省のレッドリスト:VU]



三番瀬でシオフキを獲ったミヤコドリ(撮影・田中富夫氏)